

# 学生のボランティア活動と 社会的スキルの変化に関する一考察

馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎

(佐賀短期大学生生活福祉学科、別府大学文学部人間関係学科)

(平成17年12月14日受理)

## A Consideration on Students' Volunteer Activities and Changes on Their Social Skills

Yumiko BABA, Kaori SHIMA and Kenichiro OYA

(Saga Junior College, Beppu University)

(Accepted December 14, 2005)

### Abstract

This research notes values of students' social skills (especially helping skills), and aims to explain the relationship between volunteer activities and inner changes (such as confidence and self-efficacy) of people. In this research, the samples were college students and general citizens who participated in "Special Summer Day Activities for Children with Disabilities." Data were collected by a survey and an interview, and were analyzed.

The results indicate that the students' changes on ideas of volunteering have occurred. That the students, as volunteers, experienced the care for the children with disabilities and positions in the community has lead to changing perspectives on volunteer and self as well as heightening self-evaluation. In addition to that, self-evaluation has shown strong correlation with self-efficacy. Also, the results have made a suggestion that we need to create the appropriate learning environment that supports students' growth and empowers them.

## 1. はじめに

現代の福祉社会にとって、ボランティアは切っても切れない存在である。常に、多くの福祉現場からのボランティアの募集があり、本学でも、掲示板や口頭でボランティア活動を学生に紹介している。また、本学では、その活動時間が規定時間を満たすことで単位として認めるなど、学生のボランティア活動に対する前向きな取り組みがなされている。

そもそも「ボランティア」とは何であろうか。広辞苑<sup>1)</sup>によると、「(義勇兵の意)、志願者、奉仕者、自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」である。また介護福祉用語辞典<sup>2)</sup>には、「本来は、有志者、志願兵の意味。社会福祉においては、無償性、善意性、自発性に基づいて技術援助、労力提供を行う民間奉仕者を言う。」と記してある。筒井<sup>3)</sup>は、ボランティア活動の起こりについて、「1647年、イギリスのステュアート王朝下、オリバー・クロムウェルによる革命の前年、イギリス全土が混乱状態にあった時である。人々の生活が不安に満ち、自分達の村や町は自分たち自身で守らねばならない状況だった。そこで自ら進んで自警団に参加する人たちをボランティアと呼ぶようになった。その後、18世紀後半から19世紀前半にかけて、アメリカ合衆国の独立、フランス革命などに参加する義勇兵がボランティアと呼ばれ、その言葉が広がった。」と述べている。

しかし、現代において、「ボランティア」と聞いて、「義勇兵」を想像する人はどれくらい存在するのだろうか。むしろ「ボランティア」とは、「無償の活動」「偽善的」「自己犠牲」「禁欲」といったイメージを持つ人がほとんどではないだろうか。長谷川<sup>4)</sup>は、「ボランティア活動を支える理念を通常『ボランタリズム』といいますが、そのボランタリズムの使われ方にもいくつかの側面があります。基本的には、個人の自発性、あるいは任意性というものがボランタリズムの中核をなし、かつ無償性、あるいは利他性ということがいわれます。」と述べている。また、早瀬<sup>5)</sup>は「現実のボランティア活動は“我慢してする”というより、“我慢できないからする”ものだ」と述べている。とすれば、ボランティアとは、その活動において他者との関わりを持つなかで自己の欲求を満たし、自己の存在価値を確認し、あるいは自己効力感を発揮または確認する場と考えることもできるのではないだろうか。それは、個人が持つ力や自信・自尊心が高められ(エンパワーされ)、その心の力を自分が関わる他者に向け、他者を思いやる行為が生まれることと考えられるのではないだろうか。そしてそれが、長谷川の言う「利他性」に連続していくこととして捉えることができる。

長谷川<sup>4)</sup>は、「ボランティア活動における自発性というのは、主体的に他者にかかわっていくという実践に向かわせるが、その場合『自己の完成を目指す』ことと『利他的な行為』の二つの契機があるように思います。」と述べており、「利他的な行為」については、「他者のために少しでも何かをしてあげたい、あるいは役に立ちたいという奉仕である。」と説明している。つまり、他者のニーズに応えようとする、他者のニーズを満たそうとする自己の欲求が、結局は他者を満足させると同時に自己の欲求を満足させているのだと解釈することもできるのではないだろうか。

「大きくな～れ 友達の輪」は、知的障がい者や高校生を招いての本学科の恒例イベントとなった。これは、学生が、企画・準備・当日の進行のほとんどを行い、知的障がい者や高校生との交流を目的とするものであるが、その内容はボランティア活動に通じるものがある。イベントを行うなかで、学生の内面的変化を見受けることが少なくない。振り返ってみると、学生は、その活動に参加することで、今まで知らなかった自分の新たな側面を発見し、そして自分に自信を持つようになったのではないかと気づく。学生が、参加者と直接関わり、一緒になって楽しみ、同じ時間や空間、思いを共有することで自己の新たな側面を発見し、その可能性を感じる時、改めて社会的スキル(援助スキル)の重要性は軽視できないものと認識させられる。

そこから、社会的スキル(援助のスキル)は直接他者と関わるボランティアには必要不可欠なスキルであると考える。社会的スキルとは、つまり、対人関係のスキル、あるいは対人関係を保っていくためのスキルであり、対人援助職の基本であると考えられる。学生は、ボランティア活動を通して自分の持つ力に気づき、その結果、活動すること、相手を思うこと、そして相手を尊重することを、体験を通して学び、また、意識を向上させていくのではないだろうか。川元<sup>6)</sup>の自己効力感に関する研究では、体験をすることで意識の向上が見られ、また、石田・望月<sup>7)</sup>、佐々木<sup>8)</sup>により、自己効力感についても実習後に上昇することが報告されている。それらを参考にすると、本学で観察された学生の変化についても説明できると考えられ、また、ボランティア体験をすることで、意識の変化が見られることも予想される。

そこで、本研究は、学生本人の社会的スキル(特に援助のスキル)に注目し、学生のボランティア活動が及ぼす本人の内面的変化(自信・自己効力感等)についての関連を明確にすることを目的として行った。

## 2. 研究調査の対象ならびに方法

1) 対象：佐賀市が主催する「障がい児夏休み教室」に参加したボランティアを対象にした。ボランティアの構成は、短大生、大学生、及び一般社会人で、協力者は38名にのぼった。

表1 事前アンケート及び事後アンケート

<事前アンケート>		18	障がいを持つ方やおとしよりは、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う。
1	自分は、過去に、障がいを持つ方やおとしよりにたいして偏見を持っていた。	19	障がいを持つ方やおとしよりだからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している。
2	障がいを持つ方やおとしよりと、もっと話がしたい、もっと相手を知りたいと思う。	20	障がいを持つ方やおとしよりに対して、「はれもの」にさわるような接し方をしてしまう。
3	ボランティア活動は、「何かをしてあげる」というものではないと思う。	<事後アンケート> 事前アンケートに以下の14項目を追加したもの	
4	ボランティア活動をするのは、「特別なこと」ではなく、「ふつうのこと」だと思う。	21	今回のボランティア活動中、相手の困っていることの原因を聞くことができるか。
5	ボランティア活動をするのは楽しい。	22	21のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。
6	自分の周りの人は、自分のことを「やさしい」という。	23	今回のボランティア活動中、相手の困っていることの原因を推測することができたか。
7	自分がボランティア活動をしていることを、仲の良い友達に話せる。	24	23のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。
8	私は、他人の話や意見をじっくり聞くことができる。	25	今回のボランティア活動中、相手の困っていることに対する解決方法を見つけることができたか。
9	どんな人と接する時でも、基本的に「相手の意志・気持ちを尊重している。」	26	25のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。
10	障がいを持つ方やおとしよりが楽しそうな顔をしていると、自分も嬉しくなる。	27	今回のボランティア活動中、相手の意志を聞くことができたか。
11	自分自身が正しいと思う行動をするときは、世間の目は気にならない。	28	27のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。
12	ボランティア活動をする人は、「感謝されたい」とか「ほめられたい」と思っていると思う。	29	今回のボランティア活動中、相手の意志に対する解決方法を見つけることができたか。
13	障がいを持つ方やおとしよりが困っているのを、他人事とは思えない。	30	29のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。
14	障がいを持つ方やおとしよりにも、自分と同じところや自分と似ているところがあると思う。	31	今回のボランティア活動中、相手の意志を尊重した対応ができたか。
15	障がいを持つ方やおとしよりと接している自分が、世間からどう見られているかが気になる。	32	31のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。
16	障がいを持つ方は、「障がい者」と呼ばれると「いい感じがしないだろうな」と思う。	33	今回のボランティア活動中、相手の気持ちを理解して、相手が嬉しいと思うことを嬉しいと思えたか。
17	障がいを持つ方の「障がい」やおとしよりの「年齢」には、あまり目が向かず気にならない。	34	32のことについて、次は(100%中)どれくらいの確立でできると思うか。

2) 調査：①調査は事前と事後に分け質問用紙に回答する自己記入のアンケート形式で行った(表1)。質問項目は、ボランティア活動に関する意識を聞く20項目を準備しボランティア活動に参加したS短大及びN大学の学生に対し事前に記入してもらい、終了後、意識調査20項目に新たに14項目を加えて事後調査を行った。調査項目は、川元<sup>6)</sup>が行った、学生のボランティア活動意欲の変容を見るための調査項目47項目より、障がい観・老人観・ボランティア観などの大別できる項目を選んだ。また、自己効力感を測る項目については、社会的スキルのなかでも、福祉領域のボランティア活動と関係深い援助行動に区別される行為を、菊池・堀毛<sup>7)</sup>より選出している。加えた項目は援助スキルについての自己評価に関するものである。評価は、1(とてもあてはまる)から4(まったくあてはまらない)の4段階評価とした。自己効力感については、スケールは様々なものがあり、正確に判断することができなかつたため、岡<sup>8)</sup>より、%で予測する方法を選択した。これは、課題に対する確信の程度(自己効力感)を、0(まったくできない)から100%(かなり自信がある)で評価することで表すものである。事後の調査票回収はボランティア終了後2週間以内に行った。データの分析は、ボランティア活動に関する意識については、事前と事後の対比を行った。また、対比は個人を対応させ、ノンパラメトリック検定を用い分析を行った。自己の行動についての評価を行うことは、行動を分析し、「できた」「できなかった」などの判断をし、課題を明らかにすることであるといえる(坂野<sup>9)</sup>)。自己効力感の分析では、自分の行動に対する評価と行動遂行における自身の相関をみた。なお、分析には、Mac 統解析 v.1.1 ならびに SPSS forWindow sv.11を使用した。

- ②ボランティア活動終了後の学生による反省会
- ③高年齢ボランティア参加者への聞き取り調査

### 3. 結 果

今回参加した学生のボランティア活動経験回数は、未経験が1名、1回経験したことがある人が6名、2回経験したことがある人が18名、かなり多い回数経験したことのある人が13名であった。

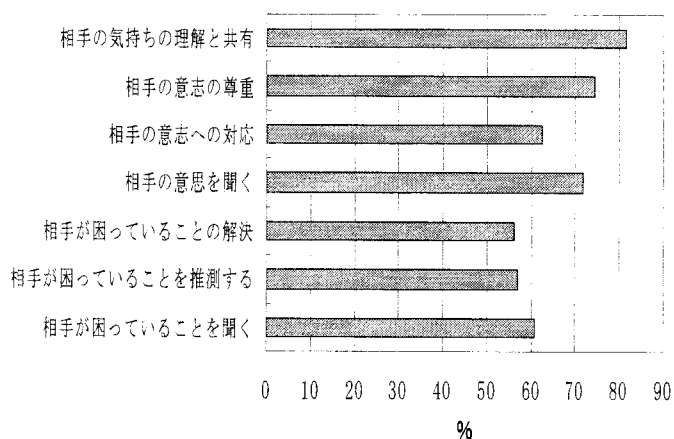
参考までに、事前調査での自己評価の個人平均は3.22(4点満点中)で、事後の個人平均は1.9であった。また、援助のスキルに対する個人平均は2.24となった(表2)。

表2 自己評価全体平均

事前個人平均	3.22
事後個人平均	1.9
スキル個人平均	2.44

自己効力感の平均は65.30%であった(図1)。また、各項目の平均は、相手の気持ちの理解と共有が81.65%を始め、意思の尊重が74.47%、意思を聞くが71.76%であった。また、相手が困っていることの解決と困っていることを推測するといったものが、それぞれ56.12%、56.82%であった。

図1 援助行動に関する自己効力感(全体平均)



自己効力感と自己評価の関係性は、1%水準で有意差がでた(表3)。この結果から自己評価の値が高いと自己効力感の値も高くなることが言える。

表3 平均の相関(効力感-自己評価)  
相関係数:ノンパラメトリック

		自己評価	自己効力感
自己評価 (平均)	相関係数	1.000	-.462(**)
	N	34	34
自己効力感	相関係数	-.462(**)	1.000
	N	34	34

\*\* 相関は、1%水準で有意となる(両側)

今回の「障がい児夏休み教室」終了後（約1ヶ月）、参加した本学の学生を集め反省会を行った。学生が出した反省点を以下にあげる（表4）。

表4 学生の反省点

(1) 障がい児に対する知識・経験不足	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知的障がいについての知識が不足していたため、子供への対応に戸惑うことがあった。</li> <li>・ 最初、障がい児との接し方がわからなかった。リーダーや他の大学の学生ボランティアスタッフに聞いて何とかうまく接することができたと思う（接し方がわからないことが恥ずかしかったけれど、そんなこと言ってはられない状況だった）。</li> </ul>	
(2) ボランティア活動における実践力・判断力の不足	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分自身が、リーダーの指示でしか動けなかった。臨機応変に動くことができなかった。</li> <li>・ 自分には適切な判断力がないと思った。</li> <li>・ 料理教室のプログラムでは、料理の知識・技術がないことを実感した。他のスタッフ（高齢者）に注意を受けた。</li> </ul>	
(3) 常識の不足	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集合時間に遅れ、迷惑をかけた。また、その際の連絡もきちんとしていなかった。子供たちと接することができてとても楽しかった。</li> </ul>	
(4) 成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知的障がい児と初めて接したが、思ったよりうまく関わることができた。母親からの事前情報（アドバイス）はありがたかった。</li> </ul>	

この反省会に参加した学生らに限定すれば、そのほとんどが、ボランティア活動をそれまでと違うイメージで捉えているという印象を受けた。端的に言うと、それまで人事（ひとごと）だったことを自己の問題として考えているということである。これに関しては、意識調査で得られた結果に合致する点である。また、この反省会の中で、家族とも友人とも教員とも違う、ボランティア活動を通しての人間関係（地域社会）の中での学びも多く聞かれたことや他のボランティア活動への意欲の向上がみられた。

一方、2名の女性ボランティア活動参加者に対するインタビューは夏休み教室が終了し、調整のついた12月に行った。A氏は、61歳でボランティア歴15年であり、B氏は71歳でボランティア歴17年であった。それぞれは、S市のボランティア協会に所属している。回答は以下のとおり（表5）。

表5 一般ボランティアの回答

質問項目	回答
ボランティア活動を始めたきっかけ	市のボランティア講座を受講した。その後校区のボランティア活動に参加するようになった。お寺でのボランティア（炊き出しなど）。
今回の「障がい児夏休み教室」への参加の動機	「行かんばいかん」、「困っているなら助けなければ」という思い。
なぜボランティア活動を行うのか	楽しいから。楽しくなければボランティアではないと思っている。一緒にボランティアを行う仲間との関係（関わり）が楽しい。学びの場であるから。もう、生活の一部になっているからあまり固く考えない。
ボランティアを受ける側にとっての自分達の存在をどう思うか	何度も援助したことのある方にとっては、安心できる存在だと思う。相手によっては、「おばあちゃん」「怒り役」。お年寄りには「話の聞き役」。
援助活動を行うことで自分がどのように変わったと思うか	自分に障がい者のサポートができるとは思わなかった。障がい者に対して見る目が変わった。困っている障がい者に対して、自然に手が出るようになった。気にしていなかったものが見えてきた（鍼灸の看板など）。障がい者に対して、どこまで援助した方がよいのかと言う見極めができるようになって来た。
学生の行動はどう映ったか	家で何もしていない学生が多いようだ。料理教室の時は、段取り全て教えなければならなかった。普段の生活が見えるようだった。先の行動を予測しない、ゆっくりしている。指示待ちの印象があった。ドタキャンが多かった。
学生ボランティアに思うこと（期待すること）	若さや体力には期待している。あとは、学生同士ばかりのボランティアの場だけではなく、異年齢のなかでのボランティア経験を積んでほしい。

その他では、「自分達は、仕事・結婚・子育て・社会参加など、たくさんの経験を積んできた。が、学生にはそれが無い。仕方がないことではあるが、これからはもっとたくさんの事を経験してほしいと思う。また、関わる学生（若者）には、自分達にも色々な事を教えていく責任があると思う。他者への思いやりの気持ちは机上では伝わらない。実行、実践。地域の中でどんな経験をするのか、家族関係など、色々なことが影響してくると思う。」というコメントを賜った。

## 4. 考 察

### 1) 援助のスキルと自己効力感

他人を助けるためには、まずその相手に何が起きているか、変化があることに気づかなければならない。学生は、その日に担当する初対面の子供と関わっていく。子供の表情、言動、動作などを観察しながら援助を行い子供の変化に注意を向け、それに気づくことから始める。しかし、相手の変化に気づいても、相手が何を要求しているのかわからなくてはならない。相手がどうしてほしいのかははっきりしない場合は、まず相手の要求を聞き、相手の要求を正確に推測しなければならない。すなわち、相手の要求を把握し、意思を理解できるようになることが大切である。

事後のアンケートの自己効力感の観測は、「相手が困っていることを聞く」、「相手が困っていることの解決」、「困っていることの推測」に関して低めの結果が出た。このことは、それらの行為を自分の能力と計りにかけ、現時点での自分の能力を判断したもので、そういった直接的な介入にはもっと多くの経験からくる自信等を必要とするスキルの本質を感じ取っている結果だからとも言えよう。それとは反対に、相手と共感するや意思を尊重するといった項目は自己効力感が高く出ている。これは、前述されたスキルとは異なり、受動的な部分が大きいスキルである。その部分が学生達の自己効力感の数値を高めた大きな理由であると考えられる。また、ボランティア活動を行う際、多くの学生が子供の気持ちを知り理解し、感情を共有できていたことはデータから容易に想像できる。

「支援のしかたの確定」と「自分の能力の確認」は、援助行動を起こすときに欠かすことのできないステップである。相手の要求に合わせて、いったいどんなやり方で援助をしたらよいかのかわからなければならない。このことがわかったとしても、その行動が自分のレパートリーの中に含まれていないと援助行動につながらないのである。「自分のできることを知る（個人的能力のチェック）」ことは援助行動を実際に引き起こす際に大切なことである。

現実には援助行動をした（あるいはしなかった）後に、もう一つのステップがある。それは、援助した（あるいはしなかった）結果がどうであったかという評価である。援助がうまくいったか悪かったか、あるいは援助しなかったことが良かったか悪かったかという評価は、それ以後の援助行動に影響をあたえる。

ボランティア活動後の学生の反省からは、「思ったよりうまく関わることができた」「リーダーの指示でしか動けなかった」との感想があった。このような感想には、援助行動を行った後に、自分の能力を確認し、判断して

いることがわかる。このように、学生は、自分の行動を振り返り分析して何が足りて何が足りていないか自己評価を行っている。自分の行動やスキルを冷静に判断することができたことで、その行動評価を基準とし、次のステップである行動予測を立てるようになる。自分の行動に対する評価は、自己の行動の分析であり、そのなかで、「できた」「できない」「どのように」などということをも明らかにしていくことである。そして、自己のデータとして保存しておき、課題と課題に対する自信として認知することなのである。したがって、相関に有意さが得られたことは、そのプロセスが、体験をとおすことによって、自己効力感が高まることが明らかになったと判断できるだろう。

自己効力感が高い学生は困難な状況においても、問題解決行動に積極的に取り組み、自分の意思、努力によって「できそうだ」「またできるだろう」という観測をもつようになる。それは、学生それぞれが自ら作り出していくものであり、援助スキルにおいても、自己効力感が高まるプロセスとなっていると言える。それに加え、自分にかかわる出来事は自分でコントロールしているという統制感をもつため、自分の行動は努力や自己決定の結果であるという意識が当然のごとく高くなっていく。また、何に対しても努力しようとする態度が見られる。援助行動の方法においても、ストレス反応（不安、怒り）を軽減するような適切な対処行動をとるようになる。言い換えれば、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかを個人で確保し、自己成長感の高まりを意識することで、次の援助行動の自信へとつながっていると考えられる。自己評価を行うプロセスを含めた自己評価が、自己効力感を高くしていったといえる。

### 2) ボランティア活動がもたらす内面の変化

まず、参加の動機であるが、これは言わば純粋な動機である。つまり、ボランティア活動が、個人の「自発性」によるものであることを表している。つまり、この場合は、それまでのボランティアの経験や、その他の社会体験から生じた内的な動力が大きいことを意味し、活動への参加を決定づけている。また、自分の変化については、自分が思った以上にサポートができた、障害者を見る目が変わったなどと、的確に表現している。その変化は、ポジティブな内容で、ボランティア活動によって引き起こされた変化であり、この点については学生の意識の変化と重なる部分が大きいと言える。これは、年齢に関係なく、動機に関係なく、ボランティア活動はある肯定的な意識の変化を個人にもたらすものであると一般的に認識されている部分と重なることが裏付けられる。そして、「学生に期待すること」、「その他」のコメントでは、他

者との関係をもつこと、一緒に活動をすることによって様々な事柄を学び、それを糧にしてさらなる自分の成長と充実した援助活動を行うことができる機会としてボランティアをとらえていることが伺える。つまり、この結果は、ボランティア活動を続けることで自己効力感をはじめとする内面の変化が起こりやすくなり、ボランティア観のみでなく人間観までも変わってくることも示唆している。

さらに注目すべき点は、高年齢ボランティアからみた学生の行動についての意見と、学生のボランティア後の反省事項が合致している点が多いことである。高年齢ボランティアが指摘していることを、学生は「自覚している」ということである。もっと言えば、それを反省材料とし、次に活かそうとする自己効力感を得ているということが、これまでの考察からも言えるのではないだろうか。つまり、学生はボランティア活動の中で、ボランティアを受ける側だけではなく、同じボランティアスタッフからも、自己に気づかされ、そして自分の力を高める努力のきっかけを多くもらっているのだと解釈できる。

今回聞き取り調査の対象となった高年齢ボランティア2名は、あくまで自然体で無理のないボランティア活動を行っているという印象を持つ。ボランティアを特別なものと思わず、肩に力が入っていない。それは、ボランティア歴の長さからいえることであろうという社会常識の再確認を意味するのである。

## 5. おわりに

ボランティア活動を行うにあたって、「動機」との関連性が問題になってくると思われる。ボランティア活動を始める動機は様々であろう。早瀬<sup>5)</sup>は、「ボランティア活動では、ちょっとした出会いや気づき、こだわりや思いつきから活動が始まる 경우가少なくない。最初は、単なる好奇心である場合さえある。」と述べている。また、先に記したとおり、「我慢できないからする」という解釈もある。そのような場合の多くは、「誰かのためになりたい」、「自分の力を活かしたい」という、いわば純粋な動機と言えるであろう。早瀬<sup>5)</sup>は、「1995年に起きた阪神・淡路大震災では、1年間で、延べ137万人以上のボランティアが活動した。その約6割は10代、20代の若者だったが、彼（女）らが被災地に向かったのは、「放っておけない」という気持ちの高まりを抑えきれなかったからだ。」としている。

しかし、本学においては、ボランティアの実施時間が規定時間を満たすことで単位取得が可能となるシステムになっており、学生の多くは、単位取得をボランティアを始める動機としている場合も多いのではないだろうか。それは、いわば不純な動機なのであるだろうか。しかし、そ

うだとしても、他者と関わりながら体験や気持ちを共有し、他者の感情に動かされる自分を知り、やがて、自分を生かすことが他者を生かすこと、あるいは、他者を生かすことが自分を生かすことだと気づくケースは珍しくない。そのことは、本研究から得られた結果からも容易に推察することができるのである。つまり、「動機」が何であれ、結果的に「利他性」や「自己効力感」に気づくことができるのであれば、「動機」の内容というのはそれほど問題にはならないのではないだろうかと考える。

筆者らは、福祉を志す学生との関わりの中で、「もっと学生の積極性や自主性を伸ばしたい。どこに（何に）そのきっかけがあるのだろうか。」と考えていた。そのきっかけは、多様性を持つであろう。しかし、本研究において、ボランティア活動を通して地域社会と関わることも、学生自身が新たな自己の力を発見し成長していく可能性を十分に含んでいるということを確認した。S市手をつなぐ育成会が、「障がい児夏休み教室」を開催するにあたっての趣意書の中に、「福祉に関心のあるボランティアの協力が得られれば、障がいを持つ子供の理解につながります。年齢や職業を超えた様々な人との出会いが、子供達の世界を広げ、多くの人との関わりが、地域貢献への自立の道を開くものと考えます。」と記されている。「多くの人との関わりが、地域貢献への自立の道を開くもの」であるならば、福祉を学ぶ学生こそ、異年齢・異環境にある他者と関わることで授業だけでは得られない多くの学びを補うことができるのではないだろうか。また、筆者ら教員は、より人間的な介護福祉士を目指す本人の意識が大切にされる環境の整備・維持に力を注ぐ必要があるのではないだろうか。

これまで、福祉教育実践ということで学生をボランティアに参加させていたことは、どの教育機関においても共通している。制度や社会の価値観が変化していくなかボランティア自体に対する価値観も様々である。筆者ら教員にとってむしろ重要なのは、ボランティア活動後の指導（対応）にあり、学生がその活動において何を感じどう成長したのかを評価し共有するシステムが必要とされているのではないかと考える。ただ単に単位取得を目的とせず、学生の自己効力感や意識を高めることを最終的な目的とし、そのことを明確化する必要性を感じてならない。

本研究は、学生個人の持つ力や自信・自尊心などに働きかけるエンパワメントに焦点をあてた指導の必要性をあらためて考える機会となった。筆者ら自身こそ、その実践のために努力していかなければならないと考える。ここで得られた結果をもとに、学生個人が持つ「力（人の強さの元）」を高めるための、すなわち学生をエンパワーする教育環境についてさらに研究し、教育実践に寄与していきたい。

## 6. 引用文献

- 1) 新村 出 編著、「広辞苑 第五版」、岩波書店
- 2) 中央法規出版編集部 編集、「改訂 介護福祉用語辞典」p.274、(1993) 中央法規出版
- 3) 筒井のり子：巡 静一・早瀬 昇 編著、「基礎から学ぶボランティア理論と実際」第2章 p.20～21、(1997) 中央法規出版
- 4) 長谷川匡俊：淑徳大学エクステーションセンター 編著（編集代表 長谷川匡俊）、「ボランティアの時代 『共生』の思想を考える」（ボランティアの理念）p.2～20、中央法規出版
- 5) 早瀬 昇：巡 静一・早瀬 昇 編著、「基礎から学ぶボランティア理論と実際」第1章 p.2～19、(1997) 中央法規出版
- 6) 川元克秀：「福祉教育・ボランティア学習活動参加後の学習者のボランティア活動意欲の変容」社会福祉学、第4巻1号、(2000)
- 7) 石田貞代・望月好子：「看護婦・看護学生の GSES 得点と臨床経験年数との関連」静岡県立大学短期大学部 研究紀要、第10号 p.137～145、(1996)
- 8) 佐々木和義：坂野雄二・前田基成 編著、「セルフ・エフィカシーの臨床心理学」、第13章 p.146～154、(2002) 北大路書房
- 9) 菊池章夫・堀毛一也：菊池章夫・堀毛一也 編著、「社会的スキルの心理学」、(社会的スキルとは) pp. 1～22、(援助のスキル) p.92～105、(1994) 川島書店
- 10) 岡 浩一郎：坂野雄二・前田基成 編著、「セルフ・エフィカシーの臨床心理学」、第19章 p.218～234、(2002) 北大路書房
- 11) 坂野雄二：坂野雄二・前田基成 編著、「セルフ・エフィカシーの臨床心理学」、第1章 p.2～11、(2002) 北大路書房